

「生活改善技術と地域社会の受容」

パネリスト

村瀬 誠氏（雨水市民の会）

山村尊房氏（厚生労働省）

益田信一氏（JICA地球環境部）

トファエル アーメッド氏

（JADEバン格拉デシュ事務所）

コーディネーター 酒井 彰（日本下水文化研究会）

本日のパネルディスカッションでは、「衛生」

ということをひとつの中心に据えますが、それだけでなく、広く開発途上国の人々の生活改善、豊かさの向上のために適用される技術、またその技術がそれを使う人、さらには地域社会に受け入れられるための伝え方、導入した後の維持管理をどうするかといったことについて、議論してまいりたいと思います。開発途上国の生活改善技術については、私は固定して考えるようなものではない

と思います。そして、新たなオプションが加われば、それだけ地域にふさわしい技術が選択できるチャンスも広がりますし、よりよい技術の選択のためには、問題を知り、技術の長所、短所や限界を知らなければならぬので、そうした過程で、援助する側もされる側も能力の向上が求められるのではないかと思います。

最初に衛生だけではないと申しましたが、あまり範囲を広げてしまうわけにも参りませんので、

「水と衛生」、この二つはベーシック・ヒューマン・ニーズとして、命と健康を維持するための基本となるものです。そして、研究発表でもこの二つはお互いに深く関係しており、一緒に考えなければだめだといった議論もありましたが、「水と衛生」に的を絞りたいと思います。また、衛生の問題は開発途上国の都市でも深刻ですが、我々の活動エリアが農村であるということから、農村において適用される技術について議論していこうと思います。

では、パネリストの方々を紹介させていただきます。

村瀬さんは、「雨水市民の会」の事務局長として国内外で幅広く活動されており、バングラデシュにおいても、簡易でローコストの雨水タンクの普及により、安全な飲料水を確保するという活動を長く行なわれてきております。今日は、こうした活動を通じて導入されてきた技術が、どのよう

に地域社会に受け入れられていったかといったことをお話しいただけたらと思います。

山村さんは、国際協力に関する仕事をさまざま経験されてきました。そのなかには、WHOや国連大学におられた際、バングラデシュの井戸水ヒ素汚染問題にもかかわってこられています。また、APNセンターでは、事務局長として、被援助国側の能力向上、すなわちキャパシティ・ビルディングをどのように図るかについて取り組んでこられました。国際機関での経験をお話しいただけたらと思います。

益田さんはJICA地球環境部でさまざまな社会開発テーマに取り組まれておりますが、水と衛生分野での技術協力の方針やJICAとしての取組みなどをお話しいただきたいと思います。それから、本会のバングラデシュ事務所副代表であるトファエル氏にも加わっていただき、自身の援助活動の経験やとくに援助される側の人々

の思いや期待などをうかがいたいと思います。

村瀬

雨水利用は、世界的にはレインウォーター・ハーベスティングと呼ばれていますが、私たちはあえて、スカイウォーター・ハーベスティングということばを使っています。そのわけをこれから説明します。

私は雨水利用の仕事をもう二五年ぐらい続けていますが、二〇〇五年には二回目の国際会議を墨田区で開催しました。この会議は、TAP (Tokyo-Asia-Pacific) スカイウォーター・フォーラムと名付けました。国連機関では、今世界で一億人位の人が安全な水にアクセスできないと言っています。ずっと一一億人なのでほんとかなと思っていますが、一一億人としておきましょう。そして、このアクセスできない人口を二〇一五年までに半減するというミレニアム開発目標がありますが、人口がさらに増えますから、無理なの

ではという話もあります。じゃどうするかということになって、その一つの解決策としてこのテーマを取り上げました。世界の人が空にTAP（蛇口）があることに気づいて、空の蛇口をうまく使えば、その多くを救えるかもしれないという戦略です。サブタイトルはいかに水危機を雨水ネットワークで乗り切るかということでした。二〇〇〇人位参加しました。

私たちがなぜバン格拉デシュにこだわっているかといいますと、日本とバン格拉デシュの空はつながっているからです。日本が水に恵まれているのはバン格拉デシュを含む南アジア、モンsoon・アジア地域のおかげであること、そして同じモンsoon人としてバン格拉デシュがヒ素の問題に苦しんでいるなら、恩恵を受けている日本がギブ・アンド・テイクで、これまで培ってきた雨水利用の技術をバン格拉デシュの人たちに使ってもらおうじゃないかというプロジェクトなので

す。

来年でちょうど一〇年目を迎えます。そこで活動を通して見えてきたものをお話したいと思っています。私たちのプロジェクトはおもに海岸地域で行っています。この地域では、池で牛を洗ったりしているのが、クリプトスポリジウムや、ジアルディアといった原虫や寄生虫のリスクもあります。これらには塩素がききません。消化器系の伝染病も昔からよく流行ったところです。この地域では最近ではエビの養殖場がたくさんできていて、そのエビは日本にもやってくるということ、日本に関係があるにもかかわらず、私たちはよく知りません。エビの養殖は海水で行いますから、地下水に塩水が含まれます。口に入れてみると井戸水がしょっぱいです。そして、トイレも不十分なことも大きな問題です。

結局、表流水中の病原性微生物のために、それを含んだ水を飲んで多くの子供たちが死んでき

たために、国連の提言もあつて井戸を掘るようになりました。しかし、地下にはヒ素の鉱脈が走っていました。これは、ネパールからガンジス川一帯の問題で、言ってみれば、パンドラの箱を開けてしまったのです。20世紀の安全な飲み水確保の問題ではもつとも大きな失敗かもしれせん。井戸を掘った人たちは、ヒ素汚染に気がつかなかつたと言っています。イギリスの研究者の報告では数千万人以上の人がWHOの基準を超えるヒ素濃度の井戸水を飲んでいるということです。飲んではいけなさと知りながら飲むしかないというところもありますし、中には貧しい人が水を買う場合もあります。この水は高いのに、きれいではありません。そして実際にヒ素の被害も出ています。

ヒ素というのは、不思議な金属で、いったん人体に入るとなかなか出てきてくれませんから、口から取り入れないということしかないと思いま

す。ヒ素を含んだ井戸水に代わる飲料水供給にはいろいろな方法があります。雨水貯留タンクもたくさん作られています、使いすぎてしまうと、水が足りなくなってしまう。パイプで給水する施設もありますが、これはコストが相当高くなってしまう、自分たちでは負担でなくなってしまう。やはり、自分がお金を出して、自分で汗を流して、参加するというのが一番大事だということが、一〇年間やってきた結論です。

私たちが最初にやったのは、雨期だけでも雨水を飲んでもらうということでした。そうとう昔は雨水を飲んでいたようなのですが、その後、池の水や井戸水に変わってしまったようです。汚染されていない水を飲むということが基本ですが、ここでは大気汚染の心配ありませんので、屋根に降った雨水の初期雨水をカットすれば、非常にきれいな水が取れます。屋根に樋をつけたらと言ったらお金がないというので、竹で作ろうという

ことで、京都の禅寺の茶室をまねて、雨水市民の会の徳永理事長が開発しました。しかし、一年通じて水を飲むためにはやはりタンクがいるということになります。何か誰でも作れて、安くできるタンクの材料はないかと探していたのですが、ピットラトリンのコンクリートリングを使えないかということからスタートしました。ピットラトリンを地上にあげると雨水タンクになります。ただしもう少し大きなリングにしました。リングのサイズは家族数によっても変えています。リングを組み立てる左官屋にとっては、トイレづくりだけでなく、雨水タンクでも仕事が来るようになりました。この地域では、地下水がしょっぱいので彼らの感覚からすると「甘い」のでスイートウォーターと言って喜ばれています。それから、子供を産んで育てる役割を担っているからでしようか、男の人より女の人のほうが熱心ですね。

私たちは自分でお金を出して参加してもらお

うということ、マイクロレジットを採用しています。我々のフアンドを向こうのNGOに管理してもらって、タンクを設置した人は一年で働いて返すというシステムです。今のところ、お金を借りることのできる人が借りているので、多くが一年で返済しています。なかには、蛇口から家の中に配管している人などもあります。タンクにはPR (People for Rainwater、雨水の会の英文名称) と記載しています。現在まで、大小含めて三〇〇基ぐらい設置しました。

われわれ自身ができることということで、ハンディクラフトをバングラデシュの女性たちに作ってもらって、日本で販売しています。この売り上げは、マイクロレジットの利子補給に充てています。また、これからのこととしてフェアトレードも検討しています。

同じ問題で、ネパールからもSOSがまいるまして、こちらではもともとエコサンをやっている

グループで、一緒にやりたいということでしたので、彼らのエコサンのプロジェクトと私たちの雨水利用のプロジェクトをドッキングして進行中です。水と衛生をセットでやっつけようとしているところ、カトマンズで驚いたことなのですが、市の水源井戸、一〇〇メートルぐらいの深さなのですが、ここからヒ素が検出されたということで、放っておいたら大変なことになるのではないかと心配しています。

山村

私にとっては、サニテーションということは現在の水道行政の仕事と直接関係ありませんが、世界的には「水と衛生」を一体的なものとして取り扱われています。日本の場合行政の縦割りということが昔から言われていますが、廃棄物対策と水道の行政の所管が別々の省に分かれた二〇〇一年以降「水と衛生」を連携させた仕事が行われる

いということを感じています。

国連のMGDでは二〇一五年という期限までに達成すべき目標を国連が掲げています。先ほど村瀬さんのお話にもありましたが、安全な飲み水に関しては、世界でまだ一一億人の人たちがアクセスできないという状況です。衛生につきましてはさらに多い二六億人ということですが、達成できていない人口の中で、アジア・太平洋地域の占める割合が非常に大きいということが言えます。安全な飲み水については六億四千万人、衛生については二〇億人が未普及状態です。

アジア開発銀行が行った「アジア水ウオッチ」というレポートでは、アジア太平洋地域での目標達成には年間八〇億ドルが必要という試算がされており、MDGの目標達成は困難であるということが言われています。

こうしたなかで、二〇〇七年一二月三・四日に別府市で第一回アジア太平洋水サミットが開か

れます。これは亡くなった橋本龍太郎元総理が昨年メキシコで開かれた第四回世界水フォーラムで提案されたものです。初めて国の首脳級が参加する水の会議が開かれることになっています。世界水フォーラムにも皇太子殿下がご参加になりましたが、この別府の会議でも皇太子殿下の参加が予定されています。さらにオランダの皇太子も参加されると聞いています。世界の首脳といっても各国がすべて首脳というわけにはいかないのですが、日本は福田首相に出席していただくよう準備しているようです。そうした中で、今政府の一員としての立場でこの会議の準備にも参加しておりまして、レポートの中に記載されている内容を拾ってみますと、水供給施設の課題としては、都市周辺部や人口密度の高い農村部が重要地域として挙げられており、そのために簡易水道、小規模水道など様々なタイプの水供給施設を考えていかなければならないとされています。ただ国

によって、簡易水道、小規模水道といってもその定義はさまざまだろうと思います。一つの例ですが、人口三〇〇万人の中国・重慶市では、都市周辺部といっても数十万人の規模の水道が必要になっていきます。これも重慶市にとっては、小規模水道だそうです。われわれの感覚からは、大都市の水道なのですが、いずれにしろそういうところがまだアジアでは未普及になっている現状があります。MDGの中では、こうした未普及の解消が重点になっているわけで、それはそれで世界の関心を高めるためには重要なフォーカスになるかと思いますが、それ以外のほんとうにだいたいなところも首脳の方々に理解してもらいたいという気持ちもあります。それは、既存施設の効率向上ということとして、漏水が多いということは、先進国を含めた話になりますが、問題だろうということです。ですから、安全な水が得られない、そのために水道が必要だということはあります

が、施設ができれば問題が解決するということでは決していないということを強調していきたいと思います。フィリピンなどですと五〇%以上が漏水で失われているなどという話もありますし、先進国でも三〇%、四〇%という漏水率の都市もあります。日本はこの点、戦後ザルのようなだと言われた時代から、努力を重ねてきた結果、現在漏水率は一〇%以下になっております。これは世界の観点から見ると、驚異的な数字で日本はやりすぎじゃないかと言われたりもします。

これからの国際協力をやっていく上で、目標の設定方法の共有化をもう少しやっていかなければいけないかなと思っています。日本は、漏水対策を重点的にやってきていますが、そのレベルを世界に求めるのは無理だよということになると、漏水対策が水道施設のオペレーション、メンテナンスの向上という話から離れてしまい、経済性のみが重視されてしまう、そういうことが懸念され

るのではないかと思います。

衛生施設に関することにつきましては、排水や排泄物の安全な利用、生態系において持続可能な衛生設備、都市部における急激な人口増加への対応、水道と同じように既存の下水設備の改善や修復、それから都市のスラム対策がとりあげられています。こうしたなかで、国連が二〇〇八年を国際衛生年ということに決めまして、衛生問題に関して世界の関心を高め、そこに資金も集めようという動きをしております。これは、MDGのターゲット10の達成状況が衛生については芳しくない、ということとも関連しています。具体的にはさまざまな啓発活動を行い、行動指針を作っているという事です。外務省のホームページを見ますと、国際衛生年の制定にあたつて日本が貢献したということが書かれています。これは、故橋本龍太郎元首相が議長をされていた国連「水と衛生に関する諮問委員会」というものがありまして、

この委員会が二〇〇七年三月にまとめた提言書

「橋本行動計画」において、国際社会は衛生に注意を向けるために「二〇〇八年国際衛生年」を国連総会決議で採択するよう呼びかけたことをきっかけにしております。そして二〇〇六年一二月、国連総会でコンセンサス採択されたものです。こうした世界の行動を促すことに日本が貢献したことは大変良いニュースだと思いますが、これをどうやって実施するのかということになるとそこが一番むつかしいことになりまして、政府のなかにおいて、これがどのように日本政府のなかで実現されていくのか注目しているわけですが、なかなか具体的に見えてこないというのが現状です。ようやく一二月四日に別府で行われるアジア太平洋水サミットの中で地域発進式が行われることになっていきます。ここには、WHOなど国連の諸機関やWTO（国際トイレ機関）、オランダ皇太子などが出席予定ですが、省庁からは環境省の

政務官が出席することになっています。

先ほどから水と衛生を一緒にやるのは世界の趨勢なのにわが国では難しいという話が出ておりますが、私はかつてWHOに在籍していた関係から、今回の地域発進式に行政の代表を出席させるべくWHOから調整するよう要請を受けました。その経緯を少しお話ししたいと思います。二〇〇一年の省庁再編までは、し尿・衛生は水道とともに厚生省の所管でしたが、し尿は、環境省の廃棄物・リサイクル対策部の所管となりました。環境省では、し尿のリサイクルは考えているが、健康に直接かわるような意味でのし尿はあまり扱っていません。国土交通省下水道部もトイレの普及といったサニテーションということではちよつと違うということとして、私も水道という立場からは出にくいということ、なかなか協力を得ることは難しかったということがありました。結局、地域発進式には、環境省が出ることになり

ましたが、衛生分野の国際協力となると、取りまとめるというか技術分野で所管する省庁はないということになります。

世界的にみると、二〇〇七年一月に国連のヘッドクォーターで発進式があり、これから世界各地で地域発進式が行われていくようです。

酒井代表からは、日本下水文化研究会のようなこの分野の関係者にとって、国際衛生年はどうな意味をもつか説明してほしいという要請を受けています。まだ、状況がよく分からないところですが、活動をされている皆さんにお願いしたいのは、情報発信することで、世界のこうした動きの中に情報をインプットしていくことをぜひやっていただきたいと思います。

益田

国際協力機構（JICA）地球環境部に所属しております益田です。JICAは政府方針のもと

にODA、すなわち外国政府に対する技術協力を実施する組織ですが、事業化に向けての調査（開発調査）や相手国実施機関の能力向上を図ったり、日本下水文化研究会の活動のような草の根レベルでの事業を委託して行っていたりしています。このようななかで、水と衛生のプロジェクト形成を地球環境部で考えています。水と衛生に関しては、前回の世界水フォーラム（メキシコ）の場で外務省が「水と衛生・拡大イニシアティブ」を発表しました。ここで特徴的なことが水供給だけでなく、衛生についての支援の必要性も強調している点です。それから、衛生分野では下水道だけでなくトイレの普及も課題として位置付けられており、水供給とあわせてトイレ普及のあり方についても検討することが重要になっています。途上国におけるトイレ普及等の衛生分野への協力については、各国で事情が異なるため具体的にこういうやり方が良いといった定ま

った方法論があるわけではなく、大学、これは衛生工学の先生や保健関係の先生ですが、あるいはNGOの方から学びながら試行錯誤しているところですよ。今日は、そうしたなかで、いくつかプロジェクトやそのほか現場を回りました結果から、いくつかの例をお見せしたいと思います。これは、だめな点を指摘するよりも、問題のある現状にも何かの理由があつて、それを改善するという視点でお話しできたらと思います。

それから、縦割りという意味では、相手国政府でも水と衛生を所管する省庁が違っていたり、トイレ普及を進めているもののし尿処理等への対策の検討がされていないということとはよくあります。JICAとしても先方政府の実施機関の責任範囲の外になることについて、どのような支援を考えればよいのか悩ましいところでもありません。

インドネシアのジャワ島は世界で一番人口密

度の高い地域ですが、水浴びをするすぐ横にトイレがあります、こういう生活を続けてきたというところで、これを変えなさいというのか、この状態のなかで衛生状態を改善するのかどちらかを選ぶことになります。このような生活は、もう伝統的になっているものです。トイレにたまったものをバキュームカーで回収するシステムがあるようですので、改善するとしたら、バキュームカーで引き抜いたし尿をどう処理していくのかということになるだろうと思います。

ラオスの村で観察しておりましたら、子供の排泄物を鳥がやってきてすぐに食べてしまいましたが、ここで感じたことは、トイレだけでなく、生活習慣全体を改善していく支援が必要ではないかということでした。また井戸水を使ったり、水はわかして飲みましようといった衛生教育をしたりするのですが、なかなか変わらないこともあります。

ベトナムの南部では、開発調査というスキームでトイレをどうやって普及していくかを考えたのですが、まず学校をエントリーポイントとして、普及してより良いものを考えていこうとしています。こちらでは、ドライトイレをもちかけたのですが、この地域では以前に他ドナーの支援でエコサン・トイレの導入が試みられたものの、地域において受け入れられなかった経緯もあり、なかなか了解は得られませんでした。やはり導入しようとするならば、よほどのインセンティブ、つまり農家の人のためになるということを示さないと、農家の人から受け入れられないことがわかりました。ベトナムでは、北部のほうでは、し尿分離のトイレが一九六〇年代、七〇年代から広まったようですが、南部ではそのようなことはありません。ベトナムでは、山岳民族の人が定住するよううに水道を準備した事例もありますが、生活全体が変わるにはさらに支援が必要なのだろうと思

います。

以上いくつかの現場から衛生を普及にあたって考えていることをお話させていただきました。

酒井

パネリストの方々から、さまざまな水と衛生に関する技術とグローバルな動きについてお話しいただきました。ただいまの益田さんのお話でも、井戸はできたがなかなか生活習慣は変わらない、ひとつのことだけをやっても生活環境の改善にはつながらないといったお話がありましたように、支援するローカルの社会にいかん技術を浸透させていくということが課題になるだろうと思います。村瀬さんのほうから、技術をどのようには伝えていくのかといったことでご発言いたさないででしょうか。

村瀬

では、失敗の話をさせていただきます。九年前、

最初に現地に入った時、少しでも早くタンクを作って普及させていきたいと思って、私たちのファウンドで作ったんですね。そして、現地の人が喜んでくれるだろうと思ったら、女の人たちに取り囲まれてしまって、何であの家だけに作るのか、私にも作ってくれ、ということをやたらに言われました。パートナーのNGOもお金ちょうだいということになりましたので、それは違うだろう。これをひとつの社会の仕組みにしていけないといけない、三年間でファンドが切れたらおしまいということでは継続できない、そこで地元の人たちをいかに参加させていくのかということが必要になります。その点で、地元の人たちのモータベーションがいかに高めるのがポイントになります。先ほどの私の話で、なぜ海岸地域を選んだというのは、モータベーション以前に、塩水の問題があつて、しょっぱいし、ヒ素も含まれている、しかも患者も出ているという、どうしようも

ないということがあります。そういう地域を選んでも、やり方も単にお金を渡すのではなくて、地元のNGOと契約を結んで、NGOにはボランティアではなくて仕事としてやってもらおう。そういうシステムといっしょに考えてやっていかないと、志があっても途中で挫折してしまうということがあるように思います。

もうひとつは、バングラデシュでは雨水利用の実績がないので、ガイドライン、マニュアルを作っていくかないと、あの国では何でも経験でやろうとします。例えば、何で水位計をつけないのかというと、水位計という発想がありません。我々がタンクの容量として、三・六トン必要だといっても、二トンで何とかなるというようなことを言います。そこで、とりあえずやってみてくださいというのにしましたが、そうすると乾期のあいだ水が使えるということではなく、タンクを作るということが目的になってしまうのです。水質のチェッ

クなどはわれわれ任せです。やはり、一月末ごろには、からになることを知って、水位計を付けてくださいということになり、水位計の作り方も教えました。一〇年のノウハウをマニュアルにして、NGO、タンクを作る左官屋さんに伝え、人材の育成も一緒にやらなければいけないということで、現在はその作業を進めています。来年（二〇〇八年）早々にはマニュアルができると思います。それを使ってきちんと管理もやれる仕組みを作っていくたいと考えています。

それから、みんなが集まってトレーニングする場所がありません。これについては、来年の二月か三月にスタートして、かたちになってくると思うのですが、トレーニングセンターとして、「雨水村」をいま作ろうとしています。雨水村では、全世帯に提供できるようさまざまなバリエーションのタンクを示していこうとしています。そして、マイクロクレジット利用できる人、できな

い人、それぞれにふさわしいオプションをあてはめて、モデルケースで実施したいと思っています。

また、ほんとうに貧しい人が、マイクロ・クレジットにもひっかからないときどうするかという課題も残されています。お金を出せない人をどうするかということになると、彼らの労働を提供してもらってもらったり、いろいろなタンクのバリエーションを考えたりして、もつとも貧しい人たちが受け入れられるようなやり方を考えなければいけないと思います。いま、考えているのはタイの技術で、タイでは非常にすぐれた雨水利用の技術があるのですが、それだと相当に安いコストでできそうです。タイのNGO、バングラデシユのNGO、そしてわれわれが協働して、一トン規模のタンクを安いコストで供給することを考えています。アフオーダブルなシステムをどうってくるかということも少し見えてきたように思います。

このようなことが、我々の次のステップです。繰り返しになりますが、あてがいのプロジェクトはうまくいかないというのが結論です。自分たちがお金を出したら、ちゃんと管理もします。技術だけでなく、やり方を含めトータルのシステムが必要です。

酒井

今おっしゃられたことは、こちら側のやり方の問題と受け入れる側のモータベーションの問題があるということであつたと思います。ここで、住民の声をいつも生で聞いていて、受け入れる側の気持ちを我々以上に理解していると思えるトファエルさんにもひとこと言ってもらいましよう。今日のプレゼンテーションでモータベーション・ギャップということを描べられていたが、これはどういうことなのかということと、どのようにこれを克服したらよいかということ

おっしゃっていただきたいと思います。

トファエル

バングラデシュでは、水と衛生の問題は最優先に解決せねばならない課題ですが、いまだに多くの問題を抱えたままです。私がプレゼンテーションで述べたギャップも問題解決を妨げている要因です。私は、理想的な状態と現実とのかい離が大きいという意味でギャップということばを使いました。こうした問題をいまだに抱えている人々のモータイベーションが低いということもその一つです。モータイベーションが高くならい大きな理由として、私は教育レベルがあると思います。しかし、人々が学校教育を受けるチャンスが少なかったということだけでなく、モータイベーションをあげるべき役割を担っている、地方政府の役人やヘルス・ワーカーと呼ばれる人たちが、十分その責任を果たしていないし、そのよう

な責任をもっていること自体あまり認識していない、さらに今の仕事にそういったことが付加されることを拒むようなところもあるということも指摘しておかなければなりません。その結果、地域の人々がいろいろな改善プログラムに参加できる機会も限られています。

これを克服するためには、地方行政の充実が必要ですが、たとえば郡の人口に対して水と衛生分野を担当する職員はきわめて少なく、政府に期待することはすぐにはできません。

このモータイベーション・ギャップを埋め合わせる活動はローカルNGOが担っているというのがバングラデシュの現状だといえます。私たちも活動のなかで、モータイベーションをあげるということをパートナーNGOとともに行っており、そのための教材を用意したり、時には劇を演じることで啓発するといった方法論をもつことが、バングラデシュのNGOとして必要なことに

なっていると考えています。

酒井

私もバングラデシュではNGOの役割が大きいということはいつも感じていますが、先ほど村瀬さんの話では、ローカルNGOはノウハウをもっていないかったり、お金で動いたりといったことがありましたが、いかがですか。

村瀬

日本人の認識からするとNGOと言えばボランティアとして、ミッションをもって活動する団体のように思いがちです。このことも私たちが学んだことなのですが、バングラデシュでは会社なのです。自治体も政府も頑張らないで、お金だけを目当てにしているところがあります。はじめ、政府機関と始めようと思いましたが、なにも実践していないで、パンフレットだけ作っているよう

な印象を受けました。現場に入っていくと、その現場で信頼されているパートナーNGOといっしょにやって、彼らもNGO活動で生活しているわけですから、ビジネスとして契約してやる必要が、ビジネスとしてやっていかなければ持続的になっていかないうところもあります。彼らを支えるフアンドをどうするかですが、いつか切れてしまう可能性もあるので、地域の人たちとNGOが、何か基金を作っていけるようなことを考えていく必要があると考えています。そうしないと管理の問題も続けれません。日本人はバングラデシュのおかげで豊かな雨をいただいているので、金儲けの必要はありませんが、本来払うべきものはローカルNGOも分担し、契約で決めたことはきちんと遂行するというルールのもとで協力していかなければやっていけないと思います。

酒井

我々が海外で技術協力する場合に必要なことをまとめていただいたような気がします。では、時間も押してきましたので、山村さんのほうから、私たちが海外技術協力の場で関係者とくに、相手国側の人たちとどうつきあっていたらいいかといったことでアドバイスをお願いします。

山村

世界のなかで、求めているものはMDGのようにひじょうに大きくて、それに対して、数字の上では小さくても地道にやっておられることは非常に素晴らしいことだと思います。世界の問題を解決するために、今まで先進国、国際機関が膨大な資源を投入してきていると思います。それにもかかわらず、現在もこういう状態になっている背景にはいろいろな問題があるわけなのですが、せっかく投入した資源が無駄になったり、作ったも

のが使われなくなって、またもとの生活に戻ってしまったりすることが、まだまだたくさん見られます。そういう後戻りを少なくしていくためには、援助される国の側の人々がきちんとした計画を立てて、問題解決に取り組んでいけるような人材を育成することが重要ではないかと思います。私自身、インドネシアで四年半、バングラデシュにも二年余りかわつてきて、開発途上国の関係者の発想が先進国からのオファーのいいところを取ってこういう姿勢が目立ち、自分たち自身で課題を発見しようという姿勢が不十分な気がしました。そうした、自分たちで発見した課題を解決する過程で、先進国側がサポートするという形のほうが、少しずつでも前に進んでいくのではないかと思います。しかし先進国から何かを提供されるのを待っていて、よさそうなどころだけをいいとこ取りするようなことでやっていく限りは資源の浪費はなくならないのではないかと思

ます。どういう課題を発見して、どういう目標を設定し、それに対してどう取り組んでいくかというプロセスにおいて、少し先にいて、いろいろな経験をもっているこちら側といっしょに考え、時にはアドバイスしていくという関係が、これから海外協力関係のなかで必要になってくると思います。

酒井

私たちも、いつもファンドを取るための申請書はこちらで書き、取れたら協力を要請するという関係だけでは長続きは難しいと思っています、パートナーとなっているNGOが自らほかの国のドナーに申請することは歓迎です。ただし、同じ技術を普及するならパイオニアはわれわれだということはおきたいですが。では、益田さん、JICAとして草の根技術協力、また衛生分野での技術協力についてひとことお願いします

す。

益田

「サニテーション」に対する支援については、その定義において下水道・浄化槽・し尿処理などの範囲とするのが適当なのか議論が定まっていません。一方で、「トイレ」そのものの改善についての協力はあまりされていないような気がします。途上国の農村地域でトイレを普及するという技術協力は、個人の家の財産を整備することにもなりかねないため成り立ちにくかったところがあります。こういった分野では草の根レベルで活動するNGOと信頼関係をもって、普及させていく技術であればJICAとしてもどんどん支援していけると思います。JICAは途上国の現場のコミュニケーションだけでなく、政府の実施機関ともかかわっていくことになるのですが、トイレそのものの改善において、どこが政府として実施機関

となるのかという問題があります。

それから、農村地域の問題だけでなく、例えばインドネシアの例ではジョグジャカルタといったところへ出張に行くのですが、一〇〇万人規模の都市圏でも、トイレはとりあえず整備されていても、その処理システムが整備されておらず、衛生は大きな問題と想っています。途上国ではこういったところはいくらでもあると思いますし、都市人口はますます増えていきますから、こういうところをどうするかということも重要な課題になってきます。日本ではバキュームカーがし尿の輸送に活躍し、戦後の衛生改善に寄与したという経験がありますから、こうしたことも伝えながら、日本からどのような技術協力をしていくかということも課題になっていると考えています。日本の援助は先方政府の要請を受けて行われますので、その国で問題意識を高めていくことも同時に必要になってくると思います。その意味から途上

国において、衛生問題やその解決のあり方等について伝えていく必要があります、JICAも日本の大学やNGOの方々や情報交換しながら解決策を考えていくことが大事だというように考えています。

酒井

それぞれの国や地域でふさわしい技術を考えるうえで、我々からの情報発信も重要になってくることがわかりました。では、最後にトファエルさんから、日本への期待についてお話いただきましたと思います。

トファエル

これまで、JADEの皆さんから多くの技術的ノウハウやプロジェクトの進め方、報告書や論文の書き方など多くのことを学んできました。私自身、おそらくこれまで自信過剰なところがあつた

と思うのですが、JADEのメンバーから指導を受けるたびに、新たな発見があるようでした。そういう意味で、日本が持っている技術の移転や経済的な支援もたいへんありがたいのですが、私としては問題解決のアプローチやさまざまな人の意見を集約する技法などをもっと学ぶ必要があると思っていますし、そうした支援の方がバングラデシユの人たちが自立的にものごとを成し遂げようとした時に役立つと思います。私たちは、これまでお金や技術の支援ばかりを要求し過ぎてきたように思います。これでは、いつまでも自立はできませんし、水と衛生の分野でいえば、今必要な技術は先進的なものではありません。どういう機能が求められているかが明確になれば、私たち自身でやれないわけではないのに、これまで、日本や欧米の国々に頼り過ぎていたと思います。私は、JADEのスタッフとして働いていて、今回来日し研究発表もさせてもらう機会を得ま

したが、バングラデシユのNGOには優秀なスタッフがたくさんいます。実践で活躍しているので、それぞれのレベルアップを図るチャンスは、政府の役人と比べて多くはありません。バングラデシユの地方政府には、十分な人も張り付いていませんし、農村で水と衛生分野の改善を担っているのはローカルのNGOだといっても過言ではありません。そういう意味で、今回の私のように、もっと多くのNGOスタッフにレベル向上の機会が与えられたら良いのではないかと思います。他の国のドナーと比べて、日本からのNGOに対する直接的な支援が少ないのではないかと思います。私が日本に期待することとして、NGOへの支援ということを述べさせていただきました。また、私もJADEの本部に全面的に依存するのではなく、自分たちでプロジェクトを開拓していくことも考えていかなければならないと思っています。

酒井

ありがとうございます。住民の声を聞くということで、ローカルのNGOや現地のスタッフとの協働は不可欠なのですが、こちらから技術を提供するだけでなく、それ以外にも期待されていることは少なくないようです。協働のあり方については模索していかなければいけないと思っています。

パネリストの方々から、たいへん有益なご議論をいただきました。立場は違ってもお互いの経験を共有する機会をもてたのではないかと思います。なお、進行役の私の不手際で、会場の方々からのご意見をうかがえなかったことをお詫びいたします。本日はご参加いただきどうもありがとうございました。

(二〇〇七年一月一七日)